
黄昏をとどめて

溝部 成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏をとどめて

【Nコード】

N6875Y

【作者名】

溝部 成

【あらすじ】

「君と僕の好きは、違いすぎるよ」

内憂外患により崩壊しつつある帝国。

かつて国首と呼ばれ、繁栄を謳歌した青家一族の末娘エンジュは、西部戦役の和約のあかしとして、西家の公子ソウセツと婚約し、辺境へ向かう。

年も育った環境も大きく違う相手に、戸惑うが…。

一方、皇宮では皇位継承をめぐる対立から、大きく政局が動こうとしていた――。

空を大鳥が旋回している。

遠く、幟がいくつも翻る城塞。見渡す荒野。

草はほとんどなく、遠い地平まで赤い土に埋め尽くされている。

曇天だ。雲が厚く立ちこめる。

激しく風が吹きつけ、吹雪のような音を立てた。人の泣き声のようにも聞こえる。

砦は鉄の厳めしい大門で固く閉じられ、見張りが壁に等間隔に配置されている。

戦場だ。

「お前はここで補給の指揮を」

大柄な体を曲げるようにして、男は狭い戸口で振り返った。堂々とした体躯の青年だ。

ずいぶん土にまみれてはいたが、彼がまといっているのは紛れもなく絹の白い軍装で、左手には大ぶりの実用的な刀剣をもっている。

唯一の装飾品は額飾りで、白銀の複雑な紋がぬいとられ、中央には涙型の大粒真珠が揺れている。

白は、西家の色だ。

「いいな？」

大らかで人をひきつける笑顔で彼は言った。

外では鬨の声が上がる。

むき出しの石壁に、西からの陽が、うすく光をさし入れる。

「なぜ。…厭だ、わたしも連れて行け」

木の椅子に座った別の青年が、頑是ない子どものように首を振っ

た。

彼の前には部屋の大部分を占める卓が置かれ、書きかけと思しき書類と筆が転がっていた。

振り返った青年とは同年代、そして口調から同輩に見えるが、彼には行軍の将校らしい様相がまったく感じられない。

略式の軍装を身につけはしているが剣は佩かず、長く伸ばした髪を白と赤の組みひもで結わえている。

白い服にも殆ど汚れらしきものは見当たらない。そして軍人としては、繊細な面。

その顔は今は怒りで、上気している。

出て行こうとしていた青年が、苦笑した。

「もう決めんだ、お前はここに残す」

狭い部屋には2人しかない。

石の壁に沈黙が落ち、兵士たちの士気の昂りが木製の床を通して伝わってくる。

剣を入り口に立てかけ、自分を睨む青年の前までくると、卓上の紙をとりあげて目を走らせた。

口笛をふく。

完璧だな、彼の口がそう動いた。

その行為に、座ったままの青年の眉間に皺がよる。目には剣呑な光がもった。

「サイカ、わたしの話を聞け」

しかし、サイカと呼ばれた青年は口元に笑みをたたえている。

「おう、でもまず俺の話からだ」

彼は片手を挙げて制止すると、早口に語った。

「総指揮権は叔父上にゆずった。俺が連れていくのは、4隊。お前は居残り」

「だから、なんでわたしがここにいなければならない、」

「お前が俺の副官だから」

「だったら、なおのこと」

しかし、サイカの意思は変わらなかった。

立ち上がるうとする相手をじゃれるように椅子に押しとどめ、紙をひらひら振る。

「急襲が俺の担当なら、これはお前の担当」

うまくいったら、な。

軽口だったが、その言葉に青年は押し黙った。

薄暗い室の中では、紙の内容も彼の表情もはつきりとは読み取れない。

どうやら、サイカの言葉をしぶしぶ受け入れたらしく、大きなため息を聞かせて、青年は椅子から静かに立ち上がった。

「吾が友に武運を。勝ちて帰れ」

勝ちて、帰れ――。

古くから繰り返されてきた戦士への餞の言葉を、口にする。

「我らの風に、勝利を」

サイカはそう返すと、相手の肩を軽く抱き、部屋をあとにした。

荒野のその地平線。

鉄の鎧で覆われた軍馬が、横列にずらりと並んでいるのが見えた。鈍いてい鉄と、盾を打ち鳴らす音。その数、十万。

強い風が、耳元でごうごうと鳴り響く。騎士たちが身につける鎧は鉛色に輝き、兜は十字に切りこみが入られている。

グルジムカの騎馬の軍勢だ。大陸最強と呼ばれる騎馬軍。帝国の西部をおびやかす敵。

大門の前でサイカは合図をして、馬にまたがった。

砦の上に、軍旗がひるがえる。

幾度も洗いをかけた白。

今日は、戻ってこられるだろうか…。

サイカは、弱気な自分を嗤うように一度、目を閉じた。

この作戦は、誰が見ても無謀だ。

だが、退路はない。

年若い騎士たちが緊張した面持ちで、彼の号令を待っている。

グルジムカの軍はここからは見えない。鋼鉄の軍団に対して、彼らは胸当てと盾で武装しているものの顔をさらして、いかにも無防備に見える。

騎士たちが風を呼ぶ祈りの声が耳を過ぎる。

耳慣れた言葉。

武運を願うまじないだ。

西家の部隊の真ん中で、サイカは息をついた。

「若、ソウセツ様は」

老騎士が先頭のサイカの横に馬をつける。

白いあごひげを加えた武人で、彼の剣の師でもあった。タカサキという。

「あいつは、置いてきた」

「それはそれは」

サイカの簡潔な返事に、タカサキは声を立てて笑った。

戦場での気負いもない、朗らかな声。

サイカも歴戦の老将に軽口で答える。

「ソウセツに何かあれば、羽鳥^{ハトリ}が泣く」目線を前へ戻して、続ける。
「敵は怖くないが、妹は怖い」

サイカの周りでどつと、にぎやかに笑い声が上がった。

行軍を共にした騎士たちだ。

「いよいよですな」

タカサキが揚々と言う。サイカは静かだが、強く頷いた。

「ああ、エテを得て還るぞ」

敵領にある交易都市をあげる。

この西部国境は、隣国グルジム力の侵攻を受け続けている。

戦線は一進一退を繰り返し、特に打つ手もない。

「今こそ、徹底的な打撃を与えて、蛮族を追い払う。雪が来る前に」

巨大な領土や豊かな資源を誇るグルジム力と、この弱小の帝国とは、根本的に持久力が違う。

総力戦ともなれば、長くは保つまい。

グルジム力と半島で隣接した西部地域が一番多くの犠牲を払うで

あろうことは、簡明な事実だ。

そのまえに。

そうなる前に、敵を大きく叩いておかねばならない。

サイカの声は、焦りと気負いさえ孕んでいる。

「勝って帰る」

「御意」

「必ずだ」

「いくぞ」

短い掛け声とともに、サイカは馬を走らせた。彼に従う4隊も遅れじと騎首を返す。

100名足らずの奇襲隊。

機動性にすぐれた、年若い騎士たちで構成された臨時の部隊だ。

陽が落ちてから、2隊を本営にぶつけ、その残りで敵軍の裏をかく。

それが、彼らに課された任務だ。

砦に残った叔父とは最後まで相容れなかった。

「せいぜい、グルジムカの大軍におびえているがいいさ」

かげる陽を追うように、馬を走らせながら、サイカは口の中でつぶやいた。

北の星が、白く輝き始めるのが合図だった。

馬のいななき。嵐のような怒号。

整然と並んだ鉄の甲冑の右軍へ、急襲がかけられる。

白い軍勢の中心でサイカが、刀身を頭上に掲げて叫ぶ。

「大地を血で染めよ！我らの風を呼べ！勝利を！！」

圧倒的な大地の震動と、舞い上がる砂塵。

血しぶきと、周りで上がる悲鳴。引きずられそうになる、生々しい戦場の様相。

彼は、集団の陣形を解き、果敢に敵の中へ馬を走らせていく。

相手のふるいかぶった剣を見事な綱さばきでかわし、踵を返す。

そのまま相手の懐へ刀を突き出す。血が彼の顔を染める。

息つく間もなく、後方からも敵が刀を振るってくる。サイカは渾身の力で相手を突き返し、軍馬に剣を突きたてた。

馬の悲鳴。棒立ちになった馬から相手は勢いよく投げ出され、その期を逃さず、彼は短刀を相手の喉元に正確に突きたてた。

サイカはほう、とため息をつき乗馬したまま屈みこみ短刀を抜き取ると髪をかきあげ、口元についた血をなめた。

「おのれ、白い幽鬼め！」

大陸西方訛りの罵りが聞こえ、横手から彼のもとへ斬り込んでくる。

強い怒りとともに繰り出された刀は重く、打ち合いは数度続く。

しかし、サイカの剣の腕の方が優れて速く、相手は喉元に刃を受けて馬から滑り落ちた。

サイカは肩で息をつくとき、血に濡れた刀を振った。
そのときだった。

背後から風をうなるような音が響き、強い衝撃とともに振りかえる間もなく、どつと矢が突き刺さった。

サイカはその勢いのまま、馬から滑り落ち、前に倒れるように両手を地面につく。

赤い砂煙と、周りの怒号が一瞬、止んだ。
衝撃に痛みが加わる。

背がもえる。
燃えるように熱い。

は、と彼は声を出すように息を吸った。
吐き出す息とともに、口から鮮血が溢れる。

とつさにサイカは口元を押さえたが、次に吸った息はすぐに咳にかわった。

まだ、…まだだ。
まだ、終わっていない。

苦しい息の中で、彼は胸元から白い布を引っ張り出した。
明らかに武人の持ち物ではない、繊細な布地。ハンカチだ。銀糸で花の刺繍が縫いとられている。その、ひと針ひと針を確認するうちに彼は指先で撫で、口元におしあてた。

「羽鳥…」

約束が、という言葉が風が拾う。

タカサキが、叫び声をあげながら、馬を走らせてくるのが目に入
った。

ああ、すまない…彼は胸をつかれるような痛みとともに、暗闇に
身をゆだねた。

誰かが呼んでいるような気がした。

蝋燭のほのおが揺れる音がし、エンジュははっと目を開く。

どうやら、うたた寝をしていたらしい。

幾度かまばたきをすると、徐々に意識がはつきりとして、頭の後ろが重く痛んだ。

開いたままの分厚い装丁の本を閉じると、エンジュは机に突っ伏した。

「エンジュ様、エンジュ——」

その声で、もう一度彼女は我に返った。

「なあに、」

あわてて手すりに寄って、階下をのぞく。コウヒだ。

「もうすぐ終わります。いつもつき合わせて、ごめんなさいね」

コウヒは、彼女が寝ていたことを見抜いたらしい。こちらを見上げる顔は微苦笑を浮かべている。

エンジュはきまり悪くなって、机の本を脇にかかえると、古びたはしごを細心の注意を払って降りた。

分厚い硝子の天窓からは薄く光がさしこみ、はしごは1段を踏むごとにぎしぎしなり、埃が舞う。

エンジュは最後の段から石床におりると、ほっと息をついた。

確認するまでもなく、年月と湿気によって、はしごは根元から腐りつつあった。

それだけではない。

石床は、一部が隆起、陥没し、土が見えている部分もある。

「もう上にあがるのは、およろしく下さいな」

あなたがケガしないかと、ひやひやします。

コウヒは心配顔で、ため息をついた。

「でも、上の棚にしか物語が置いてないのだから」

エンジユは、にっこり笑って手に持った本を見せた。

孤独な竜と美しき姫巫女の恋物語である。

この国の者なら、幼い頃に一度は寝物語に聞いたことがあるだろう。誰でも知っているおとぎ話だ。

「あら『竜と姫君』。懐かしいわ。そんなのも、ここにありませんね」

装丁の美しい表紙をのぞきこんで、感心したようにコウヒは言う。エンジユは、曖昧にほほ笑んだ。

これは、ただのおとぎ話ではないかもしれない、そうコウヒに言いたかったが、なぜか喉の奥に言葉がつかえた。

裏表紙には、英秀王エイシュウの御世の年号が刻まれていたが、作者の記名はなかった。

今から250年も昔に書かれた本だ。

段の上の史書に紛れるようにして、置かれていたのを見つけたのだ。

ばらばらとめくっただけだが、乳母たちに聞いた物語よりよっぽど詳しく書かれているようだ。

ぼんやりとそんな物思いにふけっていると、コウヒが嬉しそうに話を継いだ。

「ここは本当に、さまざまな文献があって、素晴らしいですわ」
勿論、ここには重要な外交文書やいにしへの法令、史書が眠っている。

コウヒと禁を破って入った、青家の古文書庫なのだから。

ここに置いてあるのは、大半が原本であり、重要な法文書である。ただし、その多くは虫にくわれ、黴におかされ、判読することも難しい。

青家が有り余る富を支配していた頃――いや、『国首の君』と呼ばれ権勢に酔ったころには既に、法書など見向きもされなくなっていたに違いない。

風雨にさらされ、朽ちるにまかせた古い禁書庫など、訪れる者となない。

ある日エンジンが割れ窓から書庫への出入りを見つけたことと、彼女の家庭教師であるコウヒが学院で歴史を専攻していたことは、偶然だったと言えよう。

エンジュはコウヒと、書架に文献を並べ直しながら、机いっぱい
に散らされたメモに目をやった。

書きなぐりの省略記号ばかりで、エンジュには意味が分からない
ながらも、どうやら収穫があっただけのことは、コウヒの表情で分
かる。

「今日は何を調べていたの？」

「貿易の収支報告です」

280年前の交易の様相にはまだほど遠いですが、とコウヒは語
った。

彼女は、最高学府である国学院に籍をおいている。

『専門化はよろしくない。よい研究者というのは、満天下のあらゆる
歴史事象に対応できなければならない』

師である高名な歴史家ジケイは、つねづね政治的、外交的、制度
的、叙事的な出来事記述の歴史を否定しているのだという。

弟子であるコウヒたちにも、それは求められている。

未来志向の歴史学を推進することを。

彼女が選んだのは、縦系に鎖国という貿易の転換期を、横系に人
物をとるという手法だった。

「どれくらい進んだ？」

「6頁、といったところです」

読み進めている文書は、古語で書かれており、なかなか思っよう
には進まない。

コウヒは先は長い、とばかりに肩をすくめた。

エンジュは、微笑をもらしてしまいそうになり、とっさに吐息にかえた。

コウヒが青家にいるのは、研究のためだ。ここには当時の外交文書が山のように残っている。

エンジュの父が寄宿を認める代わりに、彼女に提案したのは、未婚の家庭教師をすることだった。

「ずっと居てくれればいいのに」

「何か言いましたか？エンジュ様」

「いいえ、何も」

とっさにエンジュは首を振る。うっかり本音を聞かれてしまうところだった。

取り繕うように、重くて破損しやすい書物を本棚に戻す作業に、気持ち切り替える。

そのときだった。

耳元で風が髪をふわり、ともちあげる気配がした。

さわさわと木々がざわめくのが、割れた窓越しに見える。

『…でいるわ…はやく。…もどらなきゃ…』

ささやくような、笑い声のような、軽やかな声が聞こえる。

風の知らせだ。

エンジュは外に視線を向けた。

遠くに、回廊を早足でゆく侍女たちが見えた。エンジュを探しているに違いない。

「戻りましょうか、」

コウヒも理解したらしい。荷物を手早くまとめると、内鍵を開け

て書庫の外へ出た。

彼女が出たことを確認してから、エンジュは内側から鍵をかけ直す。そうして割れた窓辺から、外へ出た。

入るときは、この手順が反対になる。

ここは禁じられた書庫である。鍵のありかをエンジュは知らない。年齢より小柄で痩せているエンジュには、窓からの侵入が可能だが、コウヒはそうはいかないのである。

出るときに窓枠で、首と足をひっかけ、いつまでこれが可能なのか、エンジュは物語を胸に抱きかかえながら、自問自答した。

「姫、どちらにおいででしたか」

空気を張るような、凜とした声が響いた。

エンジュは慌てて本を閉じ、振り返る。

まなじりをつり上げて立っているのは、彼女の教育係であるオノセだ。

白いかんばせ。一部の隙もなく髪を結いあげ、流行りの形に複雑に結ばれたえび茶色の腰帯。いつも通り、完璧な装い。

「どこも」

エンジュはそっけなく答えた。

「わたくしが何度も申しあげていますように、」

あとの言葉を引き取って、エンジュは続けた。

「父君のいる邸で、外をうろうろと歩き回ってはならない、でしよ？」

「どこでも、でございます。御身に危険が及ばぬようにするのが、わたくしのつとめ」

「退屈な仕事ね」

「…また、コウヒ様と一緒に出かけられたのですね」

「図書室に行っていただけよ」

「探しに行かせましたが、侍女たちは見つからないと戻ってきましたわ」

「本を探していた時だったのよ、きっと」

「明りを消して、ですか？」

ばれている。

エンジンとは、唇をかみしめた。禁書庫に入っただけは、知られるとまずい。

「じゃあ、休憩に外に出ていたのよ」

「コウヒ様がいらしてから、姫はかわりましたわ」

以前は、嘘をついたりはなさらなかった…。

その言葉にエンジンは、オノセを睨みつけた。

「オノセは、コウヒが嫌いだものね」

「そんなことを申し上げているではありません」

「じゃあ、何なの」

「あの方は、——」

そこまで言つて、はつとオノセは息をのみこんだ。

エンジンには彼女が言葉をのみこんだ理由を知っていた。知っていたから、不機嫌に別の話題をふる。

「私たち、今にここで埃にまみれて、死んでしまつね。何もするところがなくなつてね」

「そんなことはありませんわ」

オノセは嚙んで含めるように続ける。

「美しく整えられていますもの、お部屋も調度も」

かみ合わない言葉に、お手上げだと、エンジンは天井を睨んでため息をこぼした。

確かに、この邸も部屋も豪奢で美しい。

父の権勢があまねく国中から、一級品ばかりを集めているのだから。

「あなたは、美しいものに囲まれていたら、満足なのでしょう」
つい、うらみ事が出る。

滑らかな漆塗りの文机、瀟洒な紋様が施された椅子、天井から掛

け下ろされた濃い藍絹や薄衣。

身の周りの物は、オノセの趣味で選ばれている。

「まあ、美しいものが一番じゃありませんか。他に、どんな基準が
ありだと？」

美しく整えた眉をあげて当然のように、こう返されれば、返事の
しようもない。

「男に生まれたかったわ」

エンジュはむつつりと文句を言う。

「なんてことを。お父君がどれほどあなたに贅沢を許しておいでか、
ご存じでしょうに！」

オノセは首を振る。

紅や絹に人生のすべてを奉げているとも云える彼女には、到底信
じがたい言葉なのだろう。

「兄君のように、ここを出たい」

口から出たら、その言葉は真実味を帯びた。

「エンジュ様」

制止の声は、彼女を勢いづけただけだった。

「兄君のように外を見たい。兄君のように学校へ行きたい。

兄君のようにたくさんの友達に囲まれてみたい。

兄君のように買い食いをしたり、いたずらをして宿舎の罰掃除を
したり、こっそり規則を破って外出したり、……」

言っているうちに、苛々としてきた。

「エンジュ様、駄々っ子の方ですわ。おやめあそばせ」

オノセはふう、と額を押さえてため息をつく。

「ウオン様からいったい何をお聞きになったのです」

ひとしきり地団太を踏むとエンジュは、大きな声で言い募った自

分が情けなくなつて、あーあと肩を落とした。

4つ年上の兄君は、学問の中心地・朱都^{シュト}で、貴族の子弟たちが通う学府『緋^ヒの学院』に入っている。

長期の休みで、年に数度、この都の本邸へ戻ってくる以外は、会うこともない。

帝の傍で、宰相という重責を務める父君とは違い、肩の力の抜き方を十二分に心得た兄は青家嫡男でありながら、問題児でもあるらしい。

時折思い出したように妹に届けられる便りは、学院で起こした騒動で埋められている。

ちよつとした暇つぶしにと、と風をつかまえる方法を教えてくれたのも彼だった。

『こつやつて、生^{イキ}気を送るんだ。ほら、やつてごらん、』
ちようちよの乗ってきた春風をつかまえて、いたずらっぽく兄は言つた。

体が丈夫でないと侍医に云われ、年中、邸の中で過ごす妹を彼なりに気遣つていたのだらう。

エンジュが見よう見まねに、風に息を送ると、彼はひゅう、と口笛をふいた。

『こりゃ、すごい。生きてるみたいだ』

兄が送つた息は、風をのぼしたり、大きくしてただ戯れるだけだったが、彼女が教えられたようにやると、まるで感情をもつた生き物のように風は声を伴い、その思いさえ伝える存在へと転化した。

青いほのおに変わつた春風は、その光の奥に、黄色い花畑で花をつみとる女たちを映しだした。

粗末な無地の衣と日よけの頭巾をかぶつた平民たち。日々の糧を

得るための、荒れた手。

その周りを飛び交う、ちようちよ、ちようちよ、ちようちよ。
そして、見渡す限りの黄色い花。

ああ、この花は何と云うのだろう。くるくると回って、きれいだった。

青い抜けるような空。ああ、明るい。はじめて、見た。もっと、もっと、もっと。

興奮にぼう、となっているエンジュの手を握り、兄は風を解放させる呪文を唱えたが彼女の呼気で縛られた風は、変化しなかった。

『強すぎる、』

と彼は小さく舌打ちをしてから、自分の指先を歯で噛み、血を餌に風を元の姿に戻してから、言った。

『いいか、エンジュ』その声は、低く憂いの響きを含んでいた。

『絶対にその力、あいつに知られてはいけない。絶対にだ』

「あいつ、って誰だったのかしら？」

エンジュは口の中で、呟く。

あの日以来、兄の彼女に対する態度が変化したように思う。

以前と同様、軽い口調と穏やかな物腰、からかう様な仕草は変わらなかったが、時折、困惑にも似た表情がよぎることがあった。

その理由を問いたいと彼女は思う。しかし、まだ今年は兄の帰省が許されていない。

「…エンジュ様、お聞きですか」

彼女は、意識をオノセに戻した。

「何、オノセ」

「お召し替えのお時間にございます、本日はご当主にご挨拶なさる
予定です」

エンジュは内心で、重いため息をついた。

オノセが5本爪の龍が縫いとられた蒼のとばりをまきあげ、控えの部屋に彼女を通す。

香炉からゆるく煙がくゆり、侍女たちが反対の部屋から装飾品や衣を手に入ってくる。

日に3度の召し替え。

人に会うことがあれば、その数だけ着替えの数は、増えた。

地には極彩色で織られた足元までのオーバドレスの上に、胸の下で、幅が指4本程度の太さの帯を巻きつけ結ぶ。これがこの国の女性たちの一般的な装いだ。

改まった場にでるときは、地の模様がうつる薄物をドレスの上に幾重にも重ねたり、下に織りの違う裾を重ねたりという重ねの色合いを楽しむ衣装が好まれる。エンジュの場合、普段着と言ってもオーバドレスの上に色みの違う青を2枚も重ねている。

貴婦人たる者、たくさんの重ねを着崩れせず纏い、重さも感じさせないよう、優雅に動くことを求められる。貴族の女性たちの日常と云われれば、仕方のないことなのだが、自室といくつかの部屋の行き来のみが平生のエンジュには、幾度もの着脱は煩わしいことこの上ない。

勿論、オノセをはじめ、彼女に仕える侍女たちは、青家のひとり娘である彼女を華やかに着飾ることが誉れであり、当然であるとの認識がある。

それにしても、衣が重い。

エンジュは、銀の腰帯びを結んでもらいながら、思った。

身にまとう絹には、全面に錦糸の刺繍が施されているからだ。頭

ももげるほど、重い。

背を覆う髪は複雑な編み込みで半分ほどが結いあげられ、その上に翡翠玉のついたかんざしを6本差される。

しゃらんしゃらん、と華奢に揺れるかんざしがどれほどの重さなのか、見ている者は考えたことがあるだろうか。

侍女がオノセに水差しを差しだす。

エンジュが水に浮いた花の中から、青い花の蕾を指さすと、オノセが慎重に手に取り髪にさしてくれる。鏡で位置を確認する。

「いいわ、ありがとう」

ほう、と侍女たちがため息をつく。彼女たちのため息は、エンジュのものとは違う。

賞賛であり、感嘆であり、満足の色なのである。

エンジュは背筋をのばし、頭を揺らさないように歩幅を小さくとりながら部屋を出た。

オノセがすぐ後ろを歩いてくるのを承知で、うめき声をあげてみせる。

「服も髪も重い」

「何をおっしゃいます、女は我慢ですわ」

平然と、オノセが返す。

何を言っても無駄な気がしたので、せめて顔つきに不満を浮かべて、エンジュは廊下を歩く。

幾つもの部屋を通り過ぎ、幾つもの角を曲がる。

「もつと、にこやかなお顔をなさいませ」

「気分が悪いのだから、これが精一杯よ」

鼻を鳴らして、エンジュは答える。

蠟燭の炎が紙を通して、明るく足元を照らす。昼間なのに、勿体

ないことだ。

夜には、光々と明かりがとる。この明かりの番をするためだけの召使が、邸には十数人もいるのだと、兄君が教えてくれたことがあるのを、エンジュはぼんやり思い出した。

行きかう人々が、脇に控えて頭を下げるなか、エンジュとオノセは、中央を進んでいく。

その時、行く手の角を曲がってこちらへ来るひとときわ美々しい女性の一団が目に入った。

エンジュは、オノセに目配せすると廊下の端へ寄った。

「ごきげんよう、」

一団の中心を進む女性は、エンジュの前で足をとめ、そっけない挨拶を寄こした。

ナルミヤだ。彩模様の扇で顔の大半を覆っているため、表情はほとんど窺えない。

帝の近親にしか許されない黄の絹を幾重にもあわせた衣装。

冠のように飾り玉が額に幾筋も揺れるかんざしは黄金でできており、左側に結びあげた髪は黒く豊かにまとめられている。

白いかんばせは人形のように硬質で若々しく、実際、年齢もリユウカとは姉妹ほどしか離れていない。

美しく整えられた手に持つ扇からは、貴族の女性たちに最も珍重されている百合の香がつん、と匂った。

エンジュは極めて事務的に膝を軽くおった。

「ごきげんよろしゅう、お母上」

この挨拶に、相手はわずかに陰のある眼差しを向けたようだった。

しかしエンジュは気付かぬふりでオノセを促し、歩き出す。
その背中へ、棘のある言葉が投げかけられる。
「可愛げのない娘だこと」

十二分に離れて次の廊下を曲がったところで、エンジュは長く吐息をついた。

「お母上は、相変わらずね」

「気になさいませんように」

オノセが慰めたが、エンジュはこうも毎回刺々しく顔を合わせられるのは、避けたいと思ってしまう。

ナルミヤは父君の最も新しい、かつ唯一の妻だ。

現帝の異腹の妹宮である。妾妃から生まれた皇女としては異例の、一品の身分を賜って青家に降嫁してきた。

この婚姻は先帝の遺言だったとかで、当時くちさがない年配の侍女たちなどは、父君がナルミヤをめとる為に先妻たちを呪い殺したのだ、と噂した。

まだ年若く気位の高い姫宮と、エンジュとの親娘関係は、そんなわけで最初から芳しくない。

それでも同じ邸に過ごすようになって、6年が経とうとしている。

「3週間ぶりだわ」

エンジュは、オノセに苦々しく呟く。

父君とは、もっと会っていない。ともすると、顔さえ忘れてしまっ
いそうになる。

挨拶の時間を意図的に作らねばならないほど、彼女の家族関係は
希薄だ。

父君は、エンジュだけでなく一人息子の雨音ウオンにも全くと言ってい

いほど、関心を持っていないようだった。

回廊を出ると、よく磨かれた青石で敷かれた玉砂利が広がる庭園に出た。

青家の本邸は石庭で名高く、雨が降ると琴をはじくような音が響く。

代わりに、花や木など生きたものは配されていない。

都の喧噪のなかにあるとは思えぬほど、硬質で静謐な邸である。

屋根つきの東屋を結ぶように舗装された小道がゆるやかに延び、

エンジュは歩調を落としてオノセに並んだ。

「父君はいつお戻りに？」

エンジュは話しかけた。

「一昨日、とうかがっておりますが」

「皇宮から？」

「そのようですね」

オノセは答えながら難しい顔つきで、考え事をしているようだった。

「先ごろ、西家を通じ、和約のための隣国の使者が到着したとか」

「西家？」

ええ、とオノセはうなづく。

西家は、文字通り帝国西部を治める大諸侯だ。

東を治める青家とは同格の『大公』の位を与えられている。

本家である白家は、とうの昔に断絶しており、今はその流れをくむ12の分家が持ち回りで当主の座に就いている。

西と言えば、半島で国境を接するグルジム力である。

屈強な騎馬軍、圧倒的な行軍力で周辺国を脅えさせる、巨大な軍事国家。

長年、帝国とは戦火を交えてきた相手だ。

「和約？」

意外な響きにエンジュは首をかしげた。

積雪のための中断はあっても、停戦や和約などという言葉は、好戦的なグルジム力に対して使われたことなどない。

「国境の砦から出撃した我がほうの少数部隊が、奇襲によってグルジム力の騎馬軍を壊滅せしめた、と聞きましたわ」

奇襲。エンジュは確かめるように、くりかえした。

奇襲とは、騎士の風上にもおけぬ策。

その策をとらねばならぬほどの不利な戦であったということか。

エンジュは胸に痛みを覚え、頭1つ分背の高いオノセを見上げた。

「勝ったの？」

エンジュの言葉にオノセは首肯する。

「そのように、うかがっておりますが、」

「——和約の条件は？」

エンジュの問いに、オノセはめずらしく逡巡してから口を開いた。

「西家の公女と、グルジム力の王太子の婚姻。および、捕虜の交換」

「……騎士たちが無事であると良いけれど」

「姫、」

エンジュには、この和約が帝国の実とはならないことを直観した。勝ち戦でなかったことも条件を見れば、納得できる。

それでも口に出して、負けた、とは言えないのだ。
オノセが眉根をよせる。

「彼らが無事に帰還することを祈りましょう」

二百数十年の長きにわたり、この国の中央政治を牛耳ったのは、『国首の君』と呼ばれた青家の一族であった。

国を閉ざし、和をもって統治しようとした代々の国首たち。

しかし二百年もたてば、汚職と暗殺の横行する、内側から腐っていく果実のような国情に憂いていた。

変革が叫ばれる中、20年前、先代国首の代に政権が再び、帝へ戻された。

一見落ち着いたかに見える帝国の内情は、内部の瓦解と並行し、外部からの侵入に悩まされ続けている。

呪術と異能の少数集団で国の根幹を支えてきたが、それもこれ以上続くかどうか。

特にここ数年は国境があわただしく、西方地域をあずかる白家の一族は苦しい負担にあえいでいる。

「このままでは、西から帝国は崩壊するでしょうね」

エンジュは、強く言った。

オノセは、慌てて彼女の口をふさぐ。

「し。どこに耳があるかしれませんが」

「かまうものか。ここにいて私が何をできるというの」

「父君は何と？」

「わたくしには、分かりかねます…ただ、手をこまねいておられるわけではありますまい」

表で取次をすることも多いオノセは、父君の置かれた政情をおぼろげながら描くことができるのだらう。

ため息をつく。

「たとえば今は『宰相の君』とはいえ、総ての権力を手にしているわけではありません。それよりも」

オノセの口調が変化する。

「エンジュ様、幾度も申しあげておりますように、力を使って厄介なことに首をつっこんではいけませんよ」

「厄介なことつて？」

「あなたの趣味の、例ののぞき見です」

ずばりと言われ、エンジュは口をとがらせた。

兄君から教えてもらって以降、風をつかまえて外の世界をのぞいていたのをオノセは知っていたらしい。

「迷惑はかけてないわ」

「必要のない力をお使いになることが、迷惑というのです」

いつもの繰り言だ。

オノセは、どんな簡単な術であってもエンジュが異能を使うことを嫌がる。

なぜ、と訊いてもはぐらかされるばかりだ。

エンジュは分かった、と頷き、それきり会話は途絶えた。

しばらく進むと翠の玉で屋根を敷かれた壮大な建物が、姿を現す。ここは父の居宮、すなわち「表」だ。

長く広い大階段を登りきると、侍従が進み出て、オノセに耳打ちする。

階でとめられるなど、普段では考えられない。

エンジュは横目でオノセの表情をうかがったが、その白い顔に何の色も読めなかった。

しばらくして二人は奥から出てきた別の侍従の案内で、当主・青龍^{リュウ}が私的な応接に使う部屋の前に立った。

ここからは、エンジュひとりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6875y/>

黄昏をとどめて

2011年11月23日19時45分発行